所蔵資料展示

ことばのやちまた

―古典文法の来た道―

令和４年12月８日～令和５年２月２日

三重大学 情報教育・研究機構 情報ライブラリーセンター

ごあいさつ

この度三重大学情報ライブラリーセンターは，館蔵貴重資料と一般書庫資料とあわせて 18 点を資料展示「ことばのやちまた　―古典文法の来た道―」として公開することにいたしました。

古典文法は中学校と高等学校の古文の時間に学びます。動詞における四段・上一段・上二段・下一段・下二段活用，カ・サ・ラ行の変格活用や形容詞のク・シク活用，係り結びの法則などが記憶にありますでしょうか。教科としての古文は，古典文法に法則性があるので得意だった人，逆に古典文法の法則を覚えなくてはならないので苦手だった人もいると思います。いずれにしても，古典文法の知識があることが古文を読むためには重要です。

古典文法の研究は室町時代には始まっていたようですが，大きく発展したのは江戸時代の国学者らの研究によります。とくに松坂（現在の三重県松阪市）の本居宣長・春庭の親子による文法研究は現在学校で習う古典文法の基礎になっています。また，宣長と春庭の研究を補訂や発展させる多くの学者があとに続きました。明治に入ってから，江戸時代の文法研究は西洋の文法研究と折衷され，さらに橋本進吉ら国語学者による研究が進んで現在に続くいわゆる学校文法が完成しました。

本展示は「ことばのやちまた」と題しましたが，これは本居春庭の著書の『詞のやちまた(詞八衢)』によります。「やちまた（八衢)」とは「道が八つに分岐している所。また，道がいくつにも分かれている辻」のことです。同じことばでもその働きざまによってどちらへもいくことから道に喩えたと春庭は述べています。

今回の展示では，三重大学の前身のひとつである三重県師範学校に同校の教諭であった阿保友一郎が寄贈した適園文庫の本が多く含まれます。阿保は単に文法への興味でこれらの本を収集したのではなく，『文典初歩』『日本文法』といった文法の教科書を編むための資料として集めたようです。三重大学の先人としての阿保の努力がうかがえます。

春庭がいうことばの変化だけでなく，古典文法の研究がさまざまな道を通過して現在に至ったことを「ことばのやちまた　―古典文法の来た道―」という題名で表現いたしました。本展示により，動詞の活用をはじめとすることばの玄妙さ，そして様々な学者の労苦によって古典文法が解明されていった過程を感じていただければと思います。

令和４年 11 月　三重大学情報ライブラリーセンター長　梅川　逸人

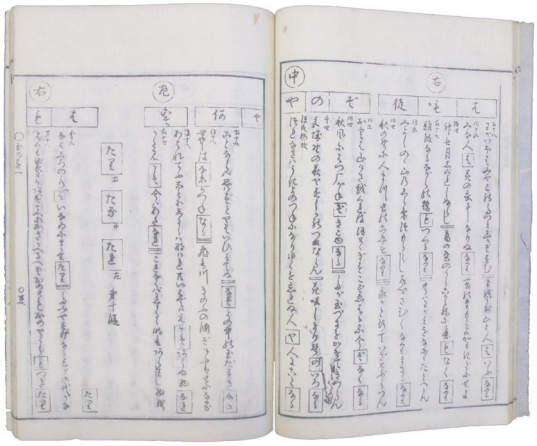
【展示凡例】

書名、読み（ひらがな)、ジャンル、整版・活字（板木の印刷本か活字本か)、大きさ（縦×横㎝)、巻冊数、編著者名、序跋者、刊行・成立年、（出版地）版元、旧所蔵元、架蔵番号の順で記述。

江戸時代の文法研究

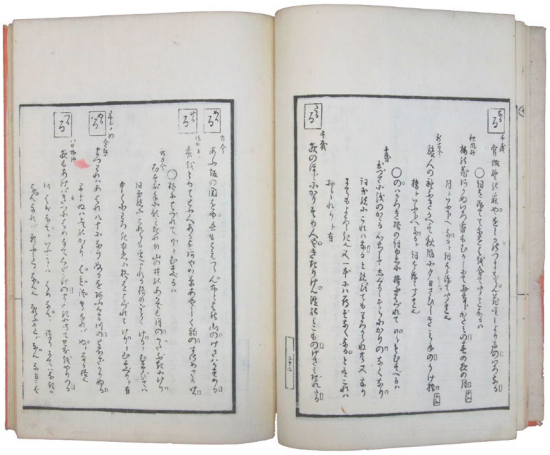
室町時代に和歌・連歌の実作のため歌学において文法研究が始まっていたが、文法研究が著しく進歩するのは、江戸時代である。『あゆひ抄』を記した富士谷成章（1738-1779）や『詞の玉緒』を記した本居宣長（1730-1801）など国学者による国語研究は古典文献を広く調べたうえで、多くの証歌にもとづき客観的に論じたものであった。国学者らの語法研究のうち、とくに活用研究はたいへん優れたもので、現在の学校文法の基礎となっている。宣長の息子の本居春庭（1763-1828）は寛政六年（1794）の失明後に、『詞のやちまた』（1806）と『詞通路』（1828）と文法研究において二冊ながらたいへん文法研究において重要な書物を残した。『詞のやちまた』は動詞の語形の変化を五十音図にもとづき、どの段に活用するかで、動詞の種類を大別したものである。盲目の大学者であった春庭については足立巻一による評伝『やちまた』(1974)に詳しい。その後、東条義門・林園雄・中島広足らが春庭の文法研究をより精緻なものへと高めた。本居学派の用言研究を行う者を「八衢派」、活用の研究をする者を一般的に「八衢学者」とさえ呼ぶように、『詞のやちまた』は後代に大きな影響を与えた。

1. 詞の玉緒



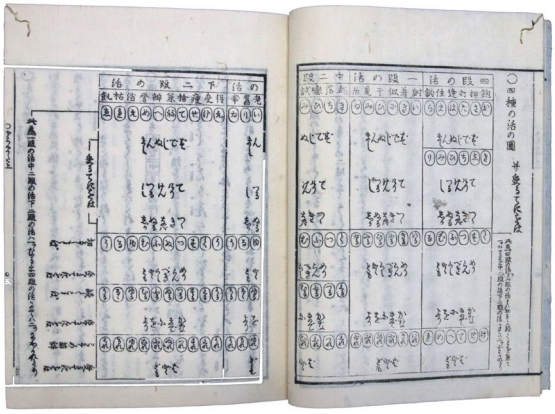
ことばのたまのお、語学、整版、
縦 25.6 ㎝×横 17.8 ㎝、7 巻 7 冊、本居宣長著、
自序（安永 8 年（1779）12 月）、稲懸大平(本居大平)序、
田中道麿跋、寛政 11 年（1799）刊、
（松阪）柏屋兵助・（京）銭屋利兵衛版、
三重県師範学校旧蔵・射和文庫、貴重書庫 815/Mo88。
　宣長が自著『てにをは紐鏡』（1771）で示した
係り結びの法則につき、
その例証を挙げて詳しく説明した書。1 巻で『紐鏡』を
目録として助動詞ごとに例を挙げ、2～7 巻でそれぞれについてさらに
詳しく例証している。『てにをは紐鏡』と本書における、係り結びによる係助詞と述語の語形変化との対応関係の研究から、宣長『御国詞活用抄』での用言の活用の研究へと進展し、鈴木朖『活語断続譜』、3『詞のやちまた』、10『活語指南』などの活用研究が導き出された。のちに 7『玉の緒繰分』、幻裡庵日善『詞の玉緒延約』、11『末分櫛』、八木立礼『詞の玉緒縁接』、12『詞の玉緒補遺』、中村尚輔『玉緒縒添』などの、いわゆる玉緒学派によって本書の補正がなされた。（吉川美優）

2. 詞のやちくさ



ことばのやちくさ、語学、整版、
縦 22.2 ㎝×横 15.2 ㎝、1 巻 3 冊、珠阿弥（元木網）著、
自序、出版年不明、（江戸）英平吉版、
三重県師範学校旧蔵・適園文庫、貴重書庫 815/Mo88。
狂歌作者・元木網『詞のもとすえ』
（寛政 10 年（1798）刊）の改題再版本。
著者名の珠阿弥は、元木網の号である。
初心者向けの和歌の「てにをは」解説書で、
本居宣長『てにをは紐鏡』1『詞の玉緒』に拠ったほか、
宣長の『玉あられ』や富士谷成章『あゆひ抄』の引用もみられる。『詞のもとすえ』からの再版時に、序文の名が「元木網」から「珠阿弥」となり、年月日の記載もなくなっている。また、『もとすえ』では序文に続いて七丁ほど狂歌の説明があるが、『やちくさ』では除かれている。さらに、五十音図などに訂正が加えられ、項目の分け方や順序も変更されている。（吉川）

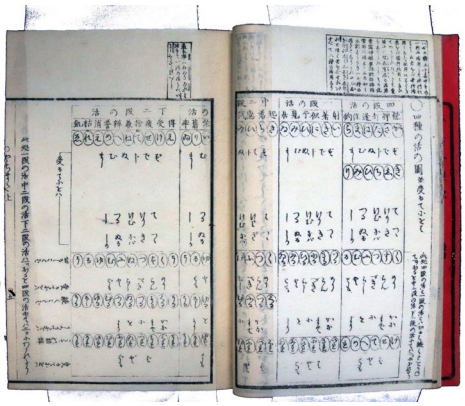
3. 詞のやちまた



ことばのやちまた、語学、整版、
縦 25.4 ㎝×横 18 ㎝、2 巻 2 冊、本居春庭著、
植松有信序（文化 3 年（1806）5 月）、本居大平跋、
文化 3 年 3 月刊、（江戸）須原屋茂兵衛・
（大坂）河内屋和助・他 9 軒版、貴重書庫 815/Mo88。

書名は『詞八衢』とも。宣長『御国詞活用抄』と
鈴木朗『活語断続譜』をもとにした動詞活用研究書。
本書により動詞の活用が簡明な形に総括され、
古語の動詞の活用体系がほとんど完成された。
活用の型（四段・一段（現在の上一段）・中二段（現在の上二段）・下二段の四種とカ変・サ変・ナ変の変格）を立て、五種の活用形を定めた。それらから活用図を作り、それに所属する語を可能なかぎり列挙し、証例や論証を加えた。用例は古語に重点が置かれている。本書に対し、東条義門が『詞八衢疑問』にて証例の若干の誤りを指摘、その後さらに形容詞・助動詞の活用を整理し、今日の文法学説の基礎が完成した。また 12 中島広足『詞八衢補遺』（安政 4 年（1857）刊）や足代弘訓『詞八衢補翼』『八衢大略』など、本書の増補・啓蒙普及の書が多く著された。（吉川）

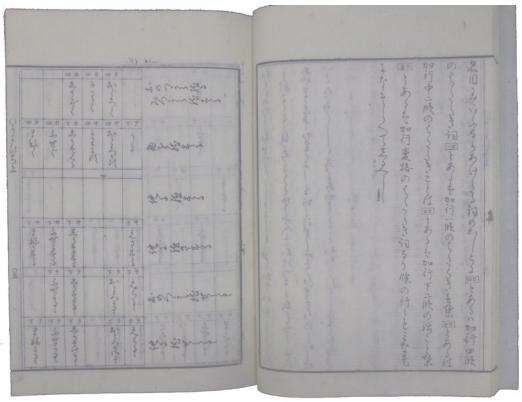
4. 増補標註言葉のやちまた



ぞうほひょうちゅうことばのやちまた、語学、整版、
縦 19.1 ㎝×横 13.0 ㎝、2 巻 2 冊、本居春庭著、
清水濱臣増補、岡本保孝標註、加部嚴夫校正、
加部嚴夫序（明治 13 年 2 月）・植松有信序（文化 3 年（1806）5 月）
本居大平跋、明治 13 年(1880)10 月刊、
（東京）清水信・（東京）江島伊兵衛版、三重県尋常師範学校旧蔵、
貴重書庫 815/Mo88。

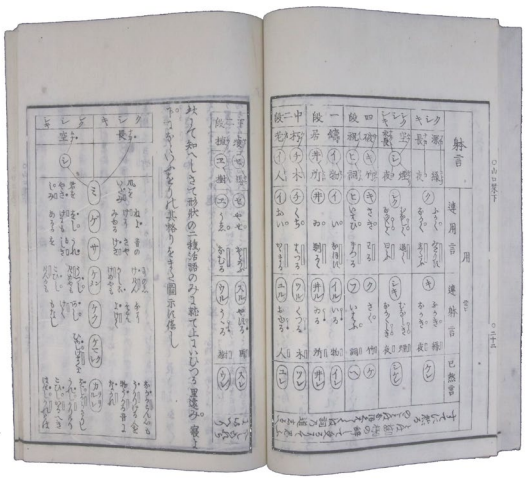
3『詞のやちまた』の増補再版本。明治に入っても重要な書籍であったことを示す。本文はもとより序文に至るまで、ほとんどの頁の上欄に頭注が書き込まれている。増補者の清水濱臣は、寛政 4 年（1792）、村田春海に入門し、考証学を学んだ。同 7 年から六国史の会読・対校を行なったが、その後は歌文を専門とし、岡本保孝や前田夏蔭ら多くの門弟を有した。標註者の岡本保孝は清水濱臣に和学を学び、のちに文部省編輯寮で国による国語辞書『語彙』（未完）の編集に従事した。校正・序文執筆を行なった加部嚴夫は、大國隆正に学び、『語学訓蒙』（明治 11 年（1878）刊）を著した人物である。（吉川）

5. 詞通路



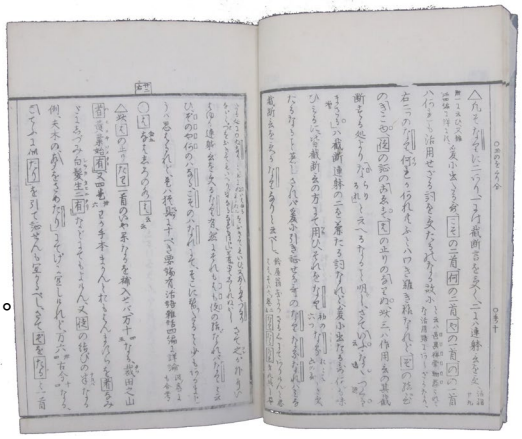
ことばのかよいじ、語学、整版、
縦 25.9 ㎝×横 18.2 ㎝、3 巻 3 冊、
本居春庭著、本居大平序（文政 11 年（1828））、
出版年不明、須受能耶（鈴屋）・（京）菱屋孫兵衛・
（名古屋）永楽屋東四郎・他 11 軒版、貴重書庫 815/Mo88。
　活用語の自他を主とし、上巻「詞の自他の事」、
中巻「詞の兼用の事」「詞の延約の事」、
下巻「詞てにをはのかかる所の事」、その他（作歌の心得、
『詞のやちまた』の学習法など）からなる。「詞の自他の事」では、
動詞を意義と形態により六種に分類し、その中での相互対立関係として自他を論じている。「詞の兼用の事」では掛詞を中心に、枕詞・序詞・縁語にも触れている。「詞の延約の事」では延言・約言の動詞の場合について整理し、「詞のてにをはのかかる所の事」ではてにをはの掛かり受けを図解した。内容の骨格は、3『詞のやちまた』での動詞の活用研究を土台に、その動詞の実際の文中での他の語句との関わり方を具体的に把握しようとしたものである。（吉川）

6. 山口栞



やまぐちのしおり、文法、整版、
縦 25.2 ㎝×横 17.9 ㎝、3 巻 3 冊、
妙玄大徳（東条義門）著、藤井高尚序（文政 3 年（1820））
・自跋、天保 7 年（1836）5 月刊、（江戸）須原屋茂兵衛・
（大坂）河内屋喜兵衛・他 11 軒版、
三重県師範学校旧蔵・適園文庫、貴重書庫 815/My1。
　本居春庭が自著 3『詞のやちまた』5『詞通路』に
挙げた動詞の活用について研究を拡充し、
さらに動詞・形容詞と
これらに類した活用をする助動詞を考察したもの。
文政元年（1818）には既に初稿が成立し、その後補訂を続けたと考えられている。上・中巻では、用言の総論と動詞について、下巻では 3『詞のやちまた』に言及が少なかった「形状言」（形容詞）とこれに類した活用をする語とを研究し、漢字の訓読の仕方も論じている。（吉川）

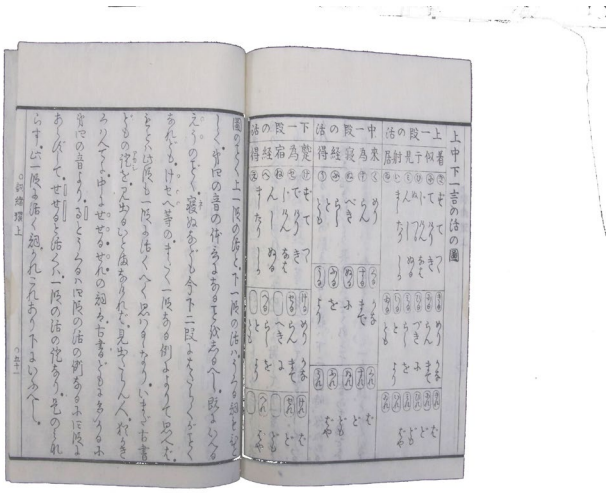
7. 玉の緒繰分



たまのおくりわけ、語学、整版本、
25.0cm×17.8cm、序並に目録 1 巻・4 巻 5 冊、
義門大徳（東条義門）著、序：千種有功
（天保 6 年（1835）2 月）跋：加納諸平（天保 12 年 6 月）、
刊年不明、京摂三書房合梓、三重県師範学校旧蔵・適園文庫、
貴重書庫 815/G45/1-5。

本書は『詞の玉緒』に説明や用例を加筆、修正したものである。
目録の冒頭に「必詞の玉緒一部と略図一
ひらとをかたはらはなたずしてみべし」とあるように、
1『詞の玉緒』とともに見ることを前提とした補訂書である。
匡郭上部にはそれぞれ『詞の玉緒』において対応する丁数が示されており、両書を対照しやすくする工夫がみられる。（大久保日南子）

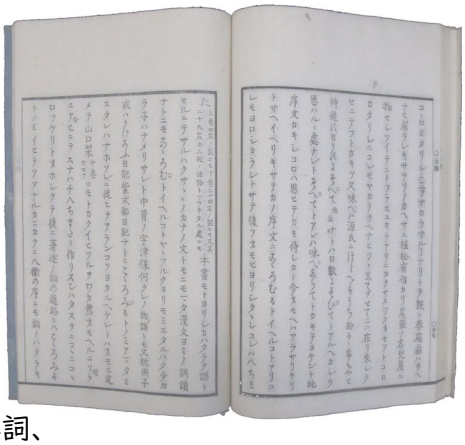
8. 詞の緒環



ことばのおだまき、語学、整版本、
26.1cm×17.8cm、2 巻 2 冊、林圀雄著、
序：藤原寛海（天保 8 年（1837）1 月）・源乃瑞雄・
日下部宿祢補矩（天保 7 年孟春）、天保 9 年刊、
（京）勝村治右衛門・（江戸）永楽屋東四郎版 他 6 軒 版、
三重県師範学校旧蔵・適園文庫、貴重書庫 815/H48/1-2。

1『詞の玉緒』や 3『詞のやちまた』などの先行する研究に
対する補正や意味上の差異について触れる。当時既刊の
林圀雄『詞の綾緒』の増補版として出された。
本書において特筆すべき点は『詞のやちまた』において示された「四種の活」を踏まえ、初めて「上一段の活」と「下一段の活」を立てたことである。この名称は「上一段活用」「下一段活用」として現在にも引き継がれている。（大久保）

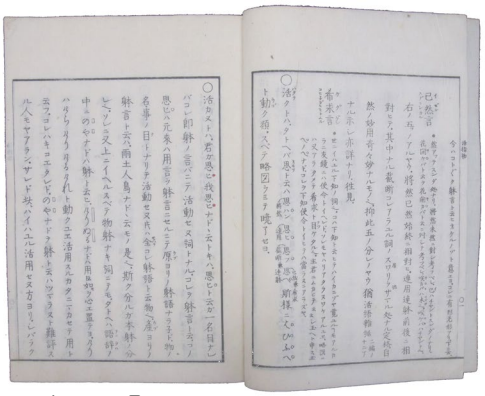
9. 活語雑話



かつござつわ、語学、整版本、
25.9cm×17.9cm、1巻1冊、妙玄大徳（東条義門）著、
序：城戸千楯（天保９年（1838）閏４月）、天保 10 年２月刊、
（京）恵比須屋市右衛門版、三重県師範学校旧蔵・適園文庫、
貴重書庫 815/My。

義門が若狭国小浜や京、江戸の知人・友人らと交わした国語に関するやり取りをまとめ、雑纂形式で収録したもの。自らの講演の手控えや筆録なども含まれる。全三篇のうち本書は第一篇にあたる。題名の「活語」が示すとおり主に動詞、形容詞、形容動詞に関する話題が扱われている。松阪の春庭の元を訪れた際の回顧談（十四条）なども見られ、春庭との関係もうかがえる。（大久保）

10. 活語指南

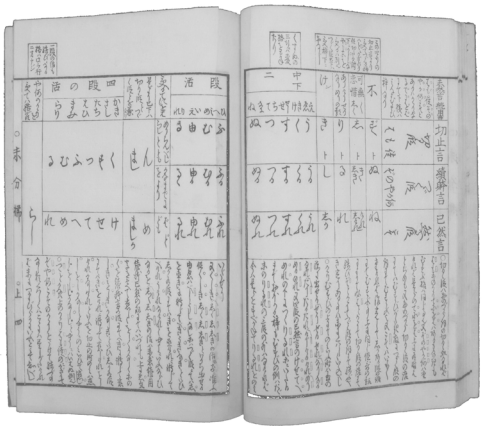


かつごしなん、文法、整版本、
25.7cm×18.2cm、2 巻 2 冊、義門大徳（東条義門）著、
序：自序（天保 11 年（1840）10 月）・
平井重民・青山茂春 跋：新井守村（天保 12 年３月）、
天保 15 年孟春刊、（京）勝村治右衛門・（江戸）岡田屋嘉七
他３軒 版、三重県師範学校旧蔵・適園文庫、
貴重書庫 815/G45/1-2。

義門『和語説略図』（1833）の解説書である。『和語説略図』は用言の活用を扱った表であり、義門『友鏡』（1823）と 3『詞のやちまた』を手近に見通すために著したとされる。『友鏡』もまた用言の活用を扱った表であり、宣長著『てにをは紐鏡』（1771）を 3『詞のやちまた』の内容で補ったものである。ゆえに本書も宣長や春庭の係り結び・動詞活用の研究に依ったものと言える。義門は用言の活用形について「将然言」「連用言」「截断言」「連躰言」「已然言」「希求言」と分類・命名したことでも知られ、これらは現在用いられている活用形に近い。本書ではこれらの活用形についても説明を加えている。（大久保）

11. 末分櫛

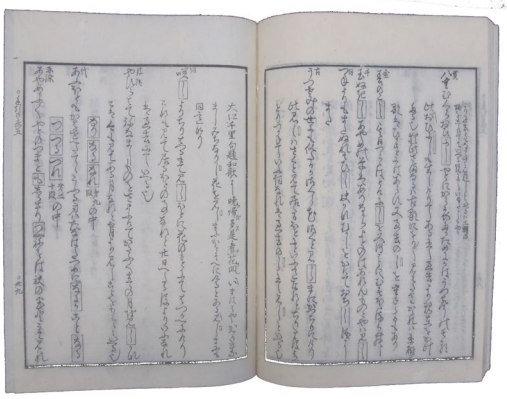
すえわけぐし、語学、整版本、
25.8cm×18.0cm、3 巻 3 冊、長野義言著 堀内広城校、
序：堀内広城（天保 15 年（1844）2 月）・
自序（天保 14 年 9 月） 跋：みとりの屋（井伊直弼）・
三浦尚之（弘化 2 年（1845）7 月）、刊年不明、
桃廼舎蔵版、三重県師範学校旧蔵・適園文庫、
貴重書庫 815/N16/1-3。



1『詞の玉緒』の補訂書として出版されたもの。
初学者向けに『詞の玉緒』の内容を簡約化している。
7『玉の緒繰分』とは異なり、
本書単独でも理解できるようになっている。無刊記で私的に出版されたものが二版あるほか、岡田屋嘉七による後印本も存在し、広く読まれたことがわかる。三重大本は無刊記初刷本にあたる。校正の堀内広城は著者長野義言の学友であり、宣長の養子本居大平と実子の春庭の門人である。跋の「みとりのや」は義言の師弟であった彦根藩主・井伊直弼である。（大久保）

12. 詞玉緒補遺（内題：手引の糸）

ことばのたまのおほい（内題：てびきのいと）、
語学、整版本、25.7cm×18.5cm、5 巻・付録 1 巻 6 冊、
中島広足著、序：鈴木重胤（安政 2 年（1855）10 月）・
源敦定（嘉永 5 年（1852）10 月）・
西田秋実（安政 5 年 11 月） 跋：島重道（安政 5 年 12 月）、
安政 7 年孟春刊、（江戸）須原屋茂兵衛・
（大坂）秋田屋市兵衛 他 9 軒 版、
三重県師範学校旧蔵・適園文庫、貴重書庫 815/N34/1-6。



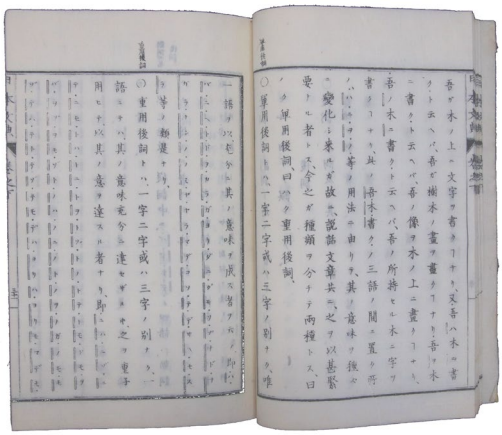
1『詞の玉緒』と、その補訂書である 7『玉の緒繰分』と
11『末分櫛』と萩原広道『てにをは係辞弁』（1849）を踏まえて
補訂したもの。これらの書に既出の用例は省略し、本書の用例はすべて中島が独自に付したものである。各項目で多く用例を挙げ、克明に解説するのが特徴。『詞の玉緒』の各巻に対応した巻立てだが、巻七に対応する内容はない。広足は宣長の門人・長瀬真幸に国学を学んだ。当時から歌人・国学者として名高く、橘守部など多くの国学者と交友があった。（大久保）

明治以降の文法書

明治以降に成立した日本語文法書は「文典」と呼ばれ、西洋の文法書の影響を受けたものと江戸期以来の国学の影響を受けたものと二種類があった。全体の枠組を西洋の文法書に拠ったものを洋式日本文典といい、品詞を七から九種にする点に特徴がある。国学の伝統を継承したものを国学的文典という。『詞のやちまた』の影響を受けた多数派の八衢派と、富士谷成章『あゆひ抄』の影響を受けた少数派に分かれていた。大槻文彦「語法指南」（明治 22 年（1889））の登場をもって近代文法学の成立といわれる。その後、目立った文法書では、「国語の本性に適合した」文法体系を考え、「体言」「用言」「助辞」といった品詞分類を行った山田孝雄『日本文法論』（1902）『日本文法学概論』（1936）や、普遍文法理論を基盤に日本語文法の構築を考えた松下大三郎の『改撰標準日本文法』（1924）『標準日本口語法』（1930）がある。現代の学校文法は橋本進吉の文法理論がもとになっている。大槻、山田、松下、橋本の文法理論と戦後の時枝誠記の文法理論とあわせて五大文法ということがある。

13. 日本文典

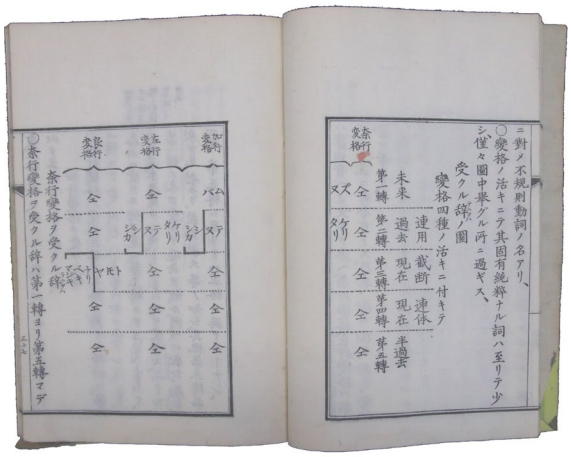
にほんぶんてん、語学、整版本、
22.3cm×14.9cm、二巻二冊、中根淑著、
（東京）森屋治兵衛版、明治 9 年（1876）刊、
清水隆（曇那伽）旧蔵・一般書庫 815/N 38/1-2。



田中義廉『小学日本文典』（明治 7）と並び、
中根淑『日本文典』は洋式日本文典の代表的著述で
後代に大きな影響を与えた。品詞を八品詞（名詞、代名詞、
形容詞、動詞、副詞、後詞、接続詞、感嘆詞）にする点に特徴がある。
後詞は英語の前置詞に相当し、日本語の助詞にあたる。
『日本文典』はおおむね開成所版『英吉利文典』に拠りつつも、
「文章論」など国学的学説を参考にしている部分もある。（吉丸雄哉）

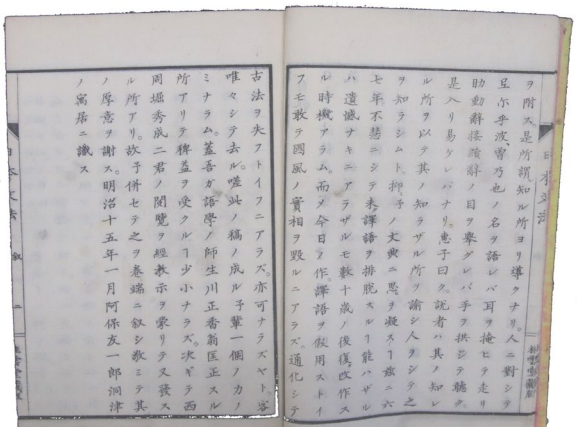
14. 文典初歩

ぶんてんしょほ、文法、整版本、
22.6cm×15.5cm、二巻三冊、阿保友一郎著、
自序、（伊賀）豊住伊兵衛版、明治 11 年（1878）刊、
適園文庫・貴重書庫 815/A14/1-2。



阿保友一郎（1848-1939）は三重県師範学校の
教諭で、「適園文庫」は阿保が師範学校に寄贈した
文庫名である。国定・検定の教科書がなかった時代に、
阿保は本書のような国語文法の教科書・教授書を
多数執筆した。題簽に「一名十四種活用図解」の
小書きがあるように、本書は文法のうち特に活用を重視した文法教授書である。国学風文典の系統にあたる。
阿保の師で津の国学者生川正香の序がある本もあるが、三重大本には生川の序は備わらない。（吉丸）

15. 日本文法



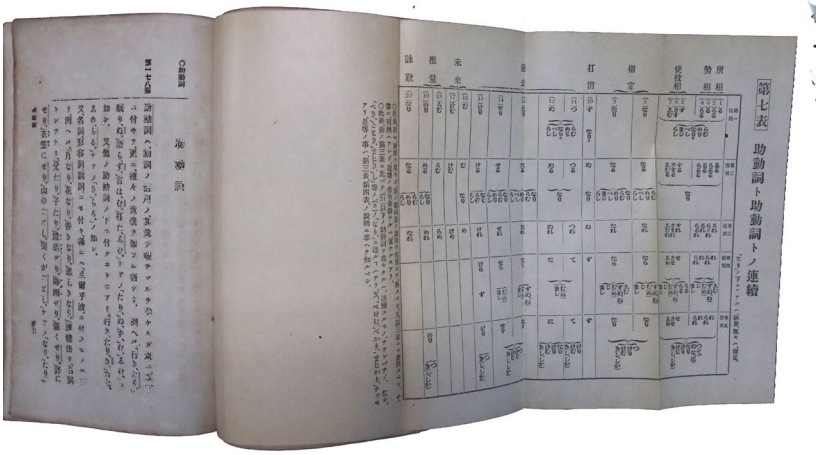
にほんぶんぽう、文法、整版本、21.5cm×14.6cm、三巻三冊、阿保友一郎著、堀秀成序（明治 15 年（1882））・西周序（明治 15 年）・自序（明治 15 年）、（伊賀）豊住伊兵衛版、明治 16 年刊、貴重書庫 815/A14/1-3。

阿保友一郎は 14『文法初歩』ののち国語文法全体を記すにあたり、従来学んできた国学風文典ではなく、洋式日本文典の形式をとった。自序によれば洋式日本文典が世に広まって「人に対して弖爾乎波（てにをは）、その名を語れば耳を掩ひて走り接続辞助動辞の目を挙ぐれば手を拱じて聞く」現状のためという。品詞の分類は洋式日本文典にもとづく一方で、動詞の活用などは下一段活用を採用しないなど『文典初歩』からの継続が見られる。（吉丸）

16. 広日本文典

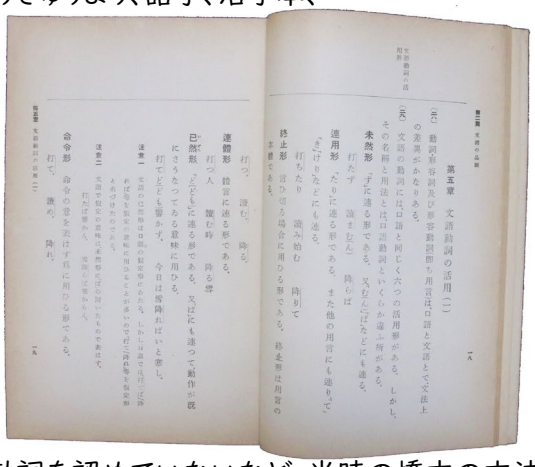
こうにほんぶんてん、語学、線装活字本、22.6cm×15.0cm、一冊、大槻文彦著、（東京）野村宗十郎版、明治 31 年第 6 版（明治 30 年初版）発行、平山重勝旧蔵・一般書庫 815/O89。

大槻文彦による国語辞書『言海』（1889）の巻頭におかれ、近代文法学のはじまりと言われた「語法指南」は本書の原稿の摘要である。国学風文典と洋式日本文典の体系を統合した内容で、「文字編」「単語編」「文章編」から成る。別冊の『広日本文典別記』とともに教科文法に多大な影響を及ぼした。文章語は平安時代の用例をもとに法則を立てた。動詞・形容詞の活用や種類は従来の研究を総合したもの。助動詞や「てにをは」（助詞）を品詞にし、助動詞の働きも現代の分類にほぼ近い。（吉丸）



17. 改制新文典上級用

かいせいしんぶんてんじょうきゅうよう、語学、活字本、



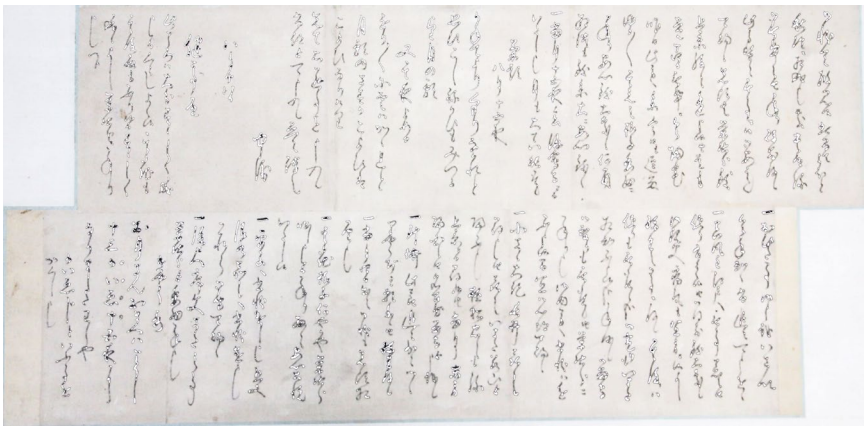
21 ㎝×14.8 ㎝、一冊、橋本進吉著、富山房、
昭和 14 年（1939）訂正再版発行（初版は昭和 13 年）、
一般書庫 815/H38。

橋本進吉の文法理論は、文を構成する要素として
「文節」を重視したもので、口語について記した
『新文典初級用』（1931）と文語について記した
本書によって世に広く知られるようになり、
文部省『中等文法』（1943）や戦後の『中等文法』「文語」
「口語」（1947）といった教科書に引き継がれ、
現代の学校文法を形作った。ただし、橋本進吉は当初は形容動詞を認めていないなど、当時の橋本の文法理論そのままではない。（吉丸）

18. 本居春庭宛本居宣長書簡

もとおりはるにわあてもとおりのりながしょかん、

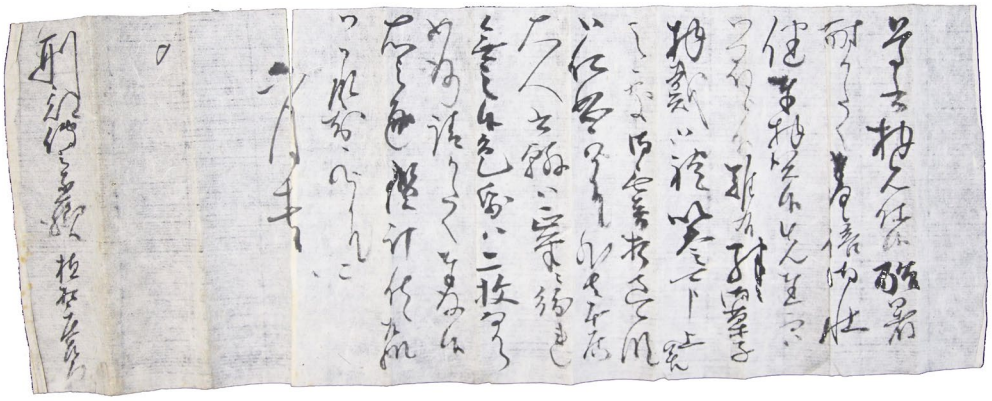
書簡、縦 14.8 ㎝×横 119.9 ㎝、一軸、刑部伝之丞。
関戸守彦旧蔵。貴重書庫。



寛政八年（1796）八月十八日付で
松阪の本居宣長（手紙の「中衛」）が
京にいた長男の春庭
（手紙の「健亭」。当時 34 歳）に
送った手紙を軸装したもの。
寛政六年に春庭は失明し、
上京して寛政七年十月から
鍼医猪川元貞のもとで鍼修行を開始した。
寛政八年に入り、春庭が妹の飛騨を相続人として婿を迎えるように、津の薬問屋へ養子に行っていた弟の栄次郎（春村）に提案したため、宣長は八月四日に手紙を持たせて栄次郎を上京させ、相続人が春庭であることを納得させた。

展示の手紙から、栄次郎は十四日に（津へ）帰宅し、翌十五日に松坂の宣長のもとに来て、春庭の様子を詳しく話したので宣長がたいへん安心したことがわかる。十五夜会で詠んだ歌にもその気持ちがあらわれている。末尾は、十五日に海会寺（かいゑじ）で詠んだ狂歌で「かいゑじ」が織り込んである。

なお、この手紙は宣長の高弟植松有信の養嗣子で尾張藩校明倫堂の教官であった茂岳（手紙の「庄左衛門」）による鑑定の手紙（縦 15.4 ㎝×横 39.6 ㎝）が付いている。宛名の「刑部伝之丞」は茂岳門人の尾張藩士である。



編集後記

本展示の企画・制作は本図書館研究開発室兼務教員の人文学部吉丸雄哉教授が行いました。解説・解題執筆は吉丸雄哉教授と人文学部文化学科の大久保日南子・吉川美優が行いました。18『本居春庭宛本居宣長書簡』の翻刻・解題作成には人文学部塚本明教授にご協力いただきました。展示品はすべて附属図書館の所蔵品です。

参考文献一覧

奥山宇七『本居宣長翁書簡集』啓文社出版、1934. 書庫 916.5/Mo 88。
山田孝雄『国語学史要』岩波書店、1941、人・日本語日本文学 810.12/Y19。
彌富破摩雄『中島廣足』厚生閣、1944。
福井久蔵『増訂日本文法史』風間書房、1953、書庫 815/F76。
古田東朔「中根淑『日本文典の拠ったもの』」(『古田東朔近現代日本語生成史コレクション』4、くろしお出版、2010。初出は 1959)。
三木幸信『義門の研究』風間書房、1963、書庫 810.1/Mi 24。
古田東朔・築島裕『国語学史』東京大学出版会、1972、開架 810.12/F94。
足立巻一『やちまた』河出書房新社、1974、開架 913.6/A16/1-2。
東条義門著・岡崎正継解説『活語指南、友鏡他』(勉誠社文庫 11)勉誠社、1976、書庫 815/To27。東条義門著・小池清治解説『活語雑話』(勉誠社文庫 65)勉誠社、1979、人・日本語日本文学 815.4/To27。
国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版、1980、人・日本語日本文学 810.3/Ko47
尾崎知光『国語学史の基礎的研究―近世の活語研究を中心として』笠間書院、1983、人・日本語日本文学 810.12/O96。
山田勘蔵『本居春庭』鈴屋遺蹟保存会、1983、開架 092.08/Y 19
『日本古典文学大辞典』岩波書店、1984、人・日本語日本文学 910.33/N77。
尾崎知光「国語学史上における『言葉のもとすゑ』『詞のやちくさ』」愛知県立大学文学部紀要委員会編『愛知県立大学文学部論集 国文学科編(35)』43-56 頁、1986。
杉本つとむ『江戸の言語学者たち』雄山閣、1987。
『国史大辞典』吉川弘文館、1989、開架・参考図書 210.03/KO53。
『日本大百科事典』小学館、1994。
『国書人名辞典』岩波書店、1998、人・日本語日本文学 281.03/Ko53/1-4。
山東功『明治前期日本文典の研究』和泉書院、2002、書庫 810.12/Sa 67。
馬淵和夫・出雲朝子『国語学史:日本人の言語研究の歴史(新装版)』笠間書院、2007、開架810.12/Ma 12。
斉木美知世,・鷲尾龍一『日本文法の系譜学 : 国語学史と言語学史の接点』開拓社、2012、810.12/Sa 21。
『改訂新版 世界大百科事典』平凡社、2014。
日本語学会編『日本語学大辞典』東京堂出版、2018、開架・参考図書 810.3/N77
浦野綾子「長野義言『玉の緒末分櫛』の修訂意図―井伊直弼と堀内広城の関与をめぐって―」2021、鈴屋学会編『鈴屋学会報』38 号 pp.35-51、和雑誌・一般誌。